

擬態語とこども No.1

—絵本にみる変化と形—

小 西 律

Mimetic word and children No.1
—variety and forms in picture book—

Ritu Konishi

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

擬態語とこども No.1

—絵本にみる変化と形—

Mimetic word and children No.1
—variety and forms in picture book—

小 西 律

Ritu Konishi

はじめに

乳児がよく遊ぶ玩具にツリースロープというものがある。早い子であれば2歳前くらいから遊んでいる。木製で右から左、左から右へと溝を設けている。スロープが付いており、穴の大きさに応じて小さい玉やもう少し大きな玉を一番上にある穴に入れ、溝づたいに斜め下に落ちてゆくを見て遊ぶものである。基本は玉が斜めの溝を下ってゆくという単純なものであるが、中には途中、スムーズに玉が下りないようなしかけを設けているものもある。様々なしかけにより玉はそのままでは止まってしまうため思考、工夫を要するものまで幅広い取り組みが可能となる玩具である。年齢が低ければ低いほど、まずはじめ、指でつまんで玉を溝に入れる作業が難しい。指先というより手でつかむため、1歳後半の乳児では比較的大きな中玉を使用し、2歳半以降になり小玉になる。また、指先で細かな物をつまむ作業は物によりつまみやすいか否か差異が生じる。うまくいかないと溝から玉が外に飛び出してしまう。この遊びを、はじめは保育者に見てもらいながら、また一緒に行って楽しみ、それから友達を加えた複数で楽しんでいる。一人の時の言葉はどうだろうか。保育者が「ころころ」と言わなければ、教えなければ、乳児の言葉は出ない。玉を追うだけである。玉が転がり落ちる姿を見て楽しみ、喜び、うまく落ちてゆけば一番下段に数個の玉が行列を作る、それも喜びの対象となる。保育者が「ころころだねえ」「ころころ落ちるね」等と言葉をくり返し発することで落ちてゆく様が転がることの「ころころ」であると認識し言葉の獲得につながるのである。乳児は自ら発する「ころころ」という言葉の響きを心地よく感じ捉えているのであろうか。遊ぶ姿は、目を見開きじっと玉を追っているが、表情は穏やかでどの子も笑顔である。

「ころころ」は擬態語であり遊びの中で取り入れてゆくため比較的早く獲得する言葉と言える。前稿『はじめてのおつかい』では擬態語についても幼児が理解しやすいようにどのように絵で描写をし

ているかを考察したが、物語絵本であったため描写は具体的であり、擬態語も内容表現の一部でしかなかった。

本稿では擬態語の中でも乳児が比較的早くに獲得される玉が転がる様の擬態語である「ころころ」を基本として、その大きさ、重さ等により変化してゆく様と形を『ころころころ』元永定正作、『まるまる ころころ』得田之久文、織茂恭子絵、辻村益朗装丁、『ごろりんごろりん ころろろろ』香山美子作、柿本幸造の3冊を選定し「擬態語とこども」の第1報として絵本より考察する。

本論

以下の3冊の絵本を考察の対象とする。

1. 題目『ころころころ』元永定作

- ・刊行年 1982年5月1日こどものとも年少版 2013年5月1日福音館の幼児絵本 61刷
- ・内容 小さな色玉が「ころころ」と転がる様子を描く。

2・題目『まるまるころころころ』得田之久文 織茂恭子絵 辻村益朗装丁

- ・刊行年 2014年3月25日 13刷
- ・内容 「ごろごろごろん」「ころころころん」等と中玉が様々なものに変形していく様子を描く。

3・題目『ごろりん ごろん ころろろろ』香山美子作、柿本幸造絵

- ・刊行年 2007年8月27刷
- ・内容 うさぎさんが森のみんなのためにテーブルと椅子を作る物語。

1.表紙(題目)について

題目、内容に擬態語を呈する絵本は数少ない。その中から「ころころ」に関連する絵本3冊を選定した。

元永作は直線上に題目を記している。小型絵本の大きさに比すると大きな文字で「ころ ころ ころ」と、「ころ」を1単位としたものを「ころ」の後、間隔をとって3個つないだもので示している。中央に小さな玉が4個ずつ描かれる。大きさは全部同じであるが、並び方が違う。直線上に左側は1

個、1個と間隔をあけて3個が並ぶ。右側は一番左の玉は2個目のみが玉の大きさ1個分上段に描かれ、あとの玉は直線上に描かれる。玉自体は左に1個、1個間隔をあけ2個目、3個目と続き1個間隔をあけ最後の4個目を描く。色彩は赤、青、桃、黄、紫、緑、オレンジと様々な色合で表現している。

得田、織茂、辻村作は、「まるまるところろ」は間隔をあけずに太さが同じ字で書かれている。しかし、題目の字は一樣ではない。黒色の「まるまる」の中には白色の点々を入れ、「ころころ」では「こ」が朱色で「ろ」は黒色を配し全体を大きな波を描くようにゆったりとした曲線上に題目を乗せている。作者についても同様に上からやや斜め下にゆったりとした曲線を中央に描き2名の作者を記している。玉については大・中・小の各玉5個、半分に切られた青の大玉の上に朱色の中玉を重ね残りの3個の玉は緑色の中玉1個、黄色と桃色の小玉2個を配し、それぞれ異なる色合を用いて表紙全体が描かれている。

香山、柿本作については題目が2段仕立になっている。はじめの行「ごろりん ごろん」は「ごろりん」が下からやや斜め上に、そして少し間隔をとって「ごろん」は直線上に書いている。「ごろりん」についてはそれぞれの文字が踊っているかのように右に左に向いて書かれ「ん」を一番高い位置に置いている。「ころろろ」は直線上に上段よりやや小さ目の文字で中央よりやや右側に寄せて記している。これまでの2冊は抽象的な玉が描かれていたが、この絵本はそれらとは異なり、主人公であるうさぎが目をしっかり開き視線は斜め前方向に向け何やら大きな丸い板状の物を荷車に乗せ引いている様が具象的に描かれる。

これらの表紙が意とするものは何か。共通するのは擬態語であるが、その擬態語をどのように言葉で絵で表現するか。玉が転がる、飛び跳ねる、落ちる様子等を玉の並び方、高低、波うつ様等の描写と言葉で端的に表現しているのが見て取れる。擬態語の題目をもってきてはいるが物語絵本としての内容を備えている香山、柿本作はうさぎが引いている荷車に乗せられている大きなものをいかにイメージするかにより擬態語の意とする凡そが分かろうというところである。しかし、この絵本の年齢は前述2冊の絵本より上の年齢を対象とし、3歳後半からと考えた方がよい。

2. 「ころころ」の変容について

元永作は中表紙に「いろだま ころころ」と小さく記されている。本来の題目である「ころころころ」は右下部に表紙より一段小さい文字で記しているが「いろだま ころころ」の3倍の大きさの表

記である。そして上部にはこの「いろだま ころころ」は一見すると副題のように見えなくもないが実は、この部分から内容は始まっていると考えてよい。細い弓形の口を開けた物体の直線上に 10 個のいろだまが 1 個から 3 個くらいの間隔を開け停止している様が描かれる。物体の開いた口からこれらのいろだまが転がり出て一定方向に進むのである。次の場面でどのように動くのか。「ころ ころころ」¹⁾と 14 個になり平面を適度な間隔をあけ 1 場面半転がり、2 場面の半分を使って「かいだんみち」と 7 段の高低差がある階段を階段の端にやっと着いたり、2 段目に登り 4 段等は次の階の直立した途上に居たりと 8 個が懸命によじ登ろうとしている様はまさに「かいだん」の「みち」なのである。「ころ ころ ころ ころ ころ ころ」3、4 場面全部を使用した段差の低い階段に 25 個となりやっと階段を上ったいろだまは、「ころころころ」と下ってゆく。次の場面「あかい みち」「ころ ころ ころ」では赤色のみを配色し夕焼け色一色に染まったいろだまが平端な道をころころと転がりながら進む。それまではバックと道、階段との色彩は分けられていたがこの場面では、すべてが真っ赤に染まり、朱色の濃淡が主を占め他の色彩はなくなっている。このようにいろだまは、このあとも「ころ ころ ころ」とゆるやかに盛り上がった丘を、でこぼこ道を進み、さかみちを登りきり、一気に直立した涯から落ちる。それでも「ころ ころ ころ」と転がりながら進み、その後も「あらしのみち」も高い「やまみち」も雲の上も「すべりだい」も「ころ ころ ころ」と進んでゆき中表紙と反対の口を開けた物体に「しゅうてん」とおさまる。口の奥に行くほどいろだまがくっついている様からはやっと動きが止まり、ここが停止場所の「しゅうてん」であることが分る。進む時は必ず全て「ころころ」と「ころ ころ ころ」である。それ以外の擬態語は記されない。小さいろだまだであるから、「ころ ころ ころ」なのであり「ごろごろ」ではない、「ころ ころ ころ」を瀧は「ひとつの物語のようになっている」²⁾と言い、「同じころころころという言葉でも、場面によって子どもたちがその言葉から受け取るメッセージはそれぞれに違う」³⁾とも指摘する。

絵本は読み聞かせの折、一度手に持つと原則動かす事はしない。場面がゆれると折角の絵が見づらいからである。しかし、この絵本はゆっくりと左右に、上下に、斜めに、また落ちる場面はさっと素早く下すことによりいろだまが様々に動いているようにイメージ化され、その動く様が「ころころ」と捉えられるという不思議な力を秘めている。

次に得田文 織茂絵はどうであろうか。

中表紙は表紙の題目をそのままって来ているが色彩に変化を付けている。青、黄、緑の他に黄緑、うす桃、うす紫を加え表紙より少しトーンを落としたものになっている。1.2 場面は 1 場面「きいろいまる しろいまる ちゃいろいまる / ごろごろ ごろん」⁴⁾と 2 行にわたって言葉が記される。3 色の大きな玉は同じ大きさであり、単に玉のみが描かれるだけではなく「ごろごろ ごろん」と大きく回転する状態が分かるように玉の周囲に沿わせ長・短の中央をややふくらとさせた球形状の短い線を付けている。「あれあれ おだんごに なったよ」3 場面が言葉を 4 場面で串にさし

た3色団子を描く。転がって出来たものを具体物のだんごで示しているのである。「むらさきのまる
むらさきのまる / ころころ ころん」5、6 場面である。5 場面に2行の言葉と赤紫、青紫、紫色の
中、小の玉を散らせ、それを6 場面に続かせている。「あれあれ ぶどうに なったよ」7 場面が
言葉、8 場面で紫色の丸い玉が集まったぶどうを描いている。大きさの違う色玉を組み合わせると何
になるのだろうと考え、思わせ、何かな何かなとの期待感、このパターンは最後まで続く。文章は1
行と2行仕立てになったものとに分けている。擬態語も変形するものによりそれぞれ「みどり」と「く
ろ」で「にゅっくにゅっく にゅっくん」で「あおむし」に、「あか」と「くろ」、「ちょこ
ちょこ ちょこん」で「てんとうむし」に、「くろ」と「しろ」、「ずっしずっしずしん」で「ば
んだ」に、「いろんないろ」と何色もの色を配置し「ひらひら ひらーり」で「ちょうちょ」に
と変身させている。「ひら ひら ひら」と「ちょうちょ」になった玉は大小の玉が重ね合わさったひ
まわりの上を飛んでゆく。ここまでが擬態語で表現され最後の場面は言葉はなく紫色の四角の中に
黄色の円を描いて終わる。主題の玉である。「まるまる」と「ころころ」をそのまま使用するのでは
なく、これらの言葉の組み合わせから様々な擬態語を引き出し、その変化する様を色合の異なる大
小の球形を重ね合わせ具体物を示すことによりイメージ化させ言葉理解、獲得につないでいる。

最後に香山作 柿本絵 ではどのように仕立てているのか。

中表紙は表表紙と同じように2 段で表示され、荷車で物を運んでいたうさぎは、荷車を作ってい
る姿で描れる。ここからは、題目と絵がまだ結びついてこない。1 場面ではうさぎが何を作っている
のか記されるだけで擬態語の表現は全くない。2 場面目になり「みんなでつかう テーブル」⁵⁾、大
きな大きな丸いテーブルを荷車に乗せ、足をふんばって野原を登ってゆくうさぎの絵を描く。目を
大きく開き、一点に視線を定めきりとした表情であるがけわしく、厳しいものではない。全体から
漂ってくるのは主人公うさぎのもつ穏やかでゆったりとした優しさである。「うん、とこ、ごろ
りん ごろりん ごろりん」とうさぎが引く荷車の音である。次に同じ場面での言葉は「ごろ
ん ごろん ごろん ごろん」と変えられている。「ごろりん」と「ごろん」との違いは次の場面
で荷物を引く重さにあったことが分かる。うさぎ自身も荷車がこれまでとは違い軽くなったと気付
く車輪に重くかかる音である。先の表現は車輪の重い音を表現していたのである。「おひるねをして
目をさましていたろばさんが」「目をさましてだまって」荷車を押している様子が描かれ、うさぎだ
けでうんとこしょ、うんとこしょと荷車を引くのではなく、ろばの助けがあると分るようになってい
る。

このようにしてきつねが、くまが、りすの兄弟がという様に次々と動物が加わり、だまって荷車
を押してゆくのであるが、動物が加わった分だけ荷車は軽くなる。それを、「ころん ころん ころ
ん ころん」「ころ ころ ころ ころ ころ ころ」「ころろろろ ころろろろ ころろろろ ころろろ
ろ」と徐々に軽快な擬態語へと変化をさせている。森の動物達がみんなで運んだテーブルは小高い丘

の頂上に据えられ、その後は擬態語の表現はない。擬態語は荷車を運ぶ時だけである。丸い大きなテーブルに動物のみんなが喜んで手をつき、「えをかこう。…ほんをよもう。…おちゃをのもう。…たのしいおしゃべりをしよう。」と思ひ思ひの気持ちを言葉に出した時にはすでにうさぎの姿はない。テーブルを置いただけでは完成ではないと気付くのである。急いで家に帰ったうさぎは夜中あかりをつけ動物の大きさに合わせたみんなの分の椅子を制作する。

テーブル、椅子を制作する時の擬態語は記されない。擬態語で表現されるのは荷車の車輪の音のみである。「ごろりん」から「ころろろろ」とまで変化させているのは心地よい言葉の響きとリズム感に重さが置かれているからと捉えられる。「ころろろろ」と響く音は実際の車輪の音とは到底考えられない。森の動物達が重い荷物を互いの心をつなげて力と力を合わせ笑顔で運んだ気持ちを軽快な音の描写にし、イメージさせていると言える。

おわりに

3冊の絵本に示された擬態語であるが日常的に使用され理解しやすい動作が継続する「ころころ」「ごろんごろん」「ころんころん」「ひらひら」から少しずつ進み停止する「ちょこちょこちょこん」、耳なれない「にゅっく にゅっく にゅっくん」「ひらーり」「ごろりん」「ころろろろ」まで多様な擬態語を見ることができる。

「ころころ」と転がる小さな玉を基本に、中玉から大玉へと大きさを変えそれに伴い擬態語も変化する。また変化した擬態語にふさわしい具体物を示すことにより擬態語のイメージがたやすく行われ、言葉の獲得につながるようにしていると言えよう。

例えば生活の中でも日常的に使用されており難解でない「ひらひら」に「ひらり」ではなく「ひらーり」と耳慣れない真新しい擬音語を加えている。「ちょうちょ」とすぐさまイメージさせるのではなく何かな、何なんだろうと思わせて終わらせるのではなく場面を「ひらーり」と一変させる効果が見事である。さっと変身させ、その後は「ひらひらひらひらひらひら」とひまわりの上を舞う、ちょうちょの姿を描きたやすくイメージできるように表現している。

また、このようなものもある。緑と黒で「にゅっく にゅっく にゅっくん」と記されるあおむしの擬態語である。これは大人でも難しく乳児は言葉の響きのみを聴覚で捉えるのみで終わってしまうのではなかろうか。少し似通った擬態語で「くねくね」はあるものの「にゅっくん」とは全く異なる。しかし乳児達はこの言葉で「きゃっきゃっ」と笑い声を立てる。擬態語のもつ概念をうち破った作者が創り出した新しい擬態語の表現である。全ての物体に擬態語がある訳ではないが「ひらーり」と薄物を翻すような語彙を「ちょうちょ」で表現しているところ等にもそれは表現されていると言えよう。

2歳の乳児、3歳の幼児に「ちょうちょうはどうやって飛んでる」と尋ねると両手を大きく広げ「ひら ひら」ではなく「ぱた ぱた ぱた ぱた」との答えが多く返ってきた。「じゃあ鳥さんは」と再度尋ねると「ぱた ぱた ぱた ぱた」と同じ答えを返して来た。「ひら ひら」、「ぱた ぱた」同じように理解し獲得している様が見て取れる。ツリースロープで1・2歳児と遊び言葉の出方を観察すると喜んでよく遊び、玉の取り合いになることにも及んだが言葉の「ころころ」は全く出て来なかった。「ころころって転がってるよ」と話しかければ「ころころ」と発する乳児もいたが一部であった。

遊びの中から獲得される語彙は具体的なものであるが故に理解する内容に間違いは少ないと言える。コミュニケーションとして必要性を持って使用される語彙とは違い、どうしても使用しなければ意が通じない等という頻度からみると必然性は低い。そのあたりが獲得に大きく関与していると考えられる。

擬態語は、擬態語のみを表現する絵本では、その言葉の概念を理解しやすい絵も混えて表現しているが、物語絵本になればそればかりとは言い切れない。なぜか。感情、心情的な要素が入り込んで来るからである。基本となる擬態語に心情を入れリズム感、軽快に澄んだ音で実際の音、擬態語とは全く異なる表現さえも行うことが出来、それでいながら違和感がない世界を創り出すことさえ可能にしてしまうからと言えるからである。

本稿では1語の擬態語の変化を考察したが、次稿では乳幼児の日常の言語に関する擬態語を絵本からもとり上げ言葉獲得の様相を考究したいと考える。

引用文献

- 1) 元永定正作：ころころ、2、1、福音館書店、(東京)、2013年 本文の引用は全てこれによる
- 2) 瀧薫：保育と絵本―発達の道すじにそった絵本の選び方―、46、28、30、31、エイデル研究所、(東京)、2012年
- 3) //
- 4) 得田之久文・織茂恭子絵・辻村益朗装丁：まるまろころころ、1、2、童心社、(東京)、2014年 本文の引用は全てこれによる
- 5) 香山美子作・柿本幸造絵：ごろりんごろんころろろ、4、5、ひさかたチャイルド、(東京)、2007年 本文の引用は全てこれによる

参考文献

- 1) 谷川俊太郎作・元永定正絵：もこもこ、文研出版、(東京)、2015年
- 2) 中村柊子：絵本の本、福音館書店、(東京)、2012年

